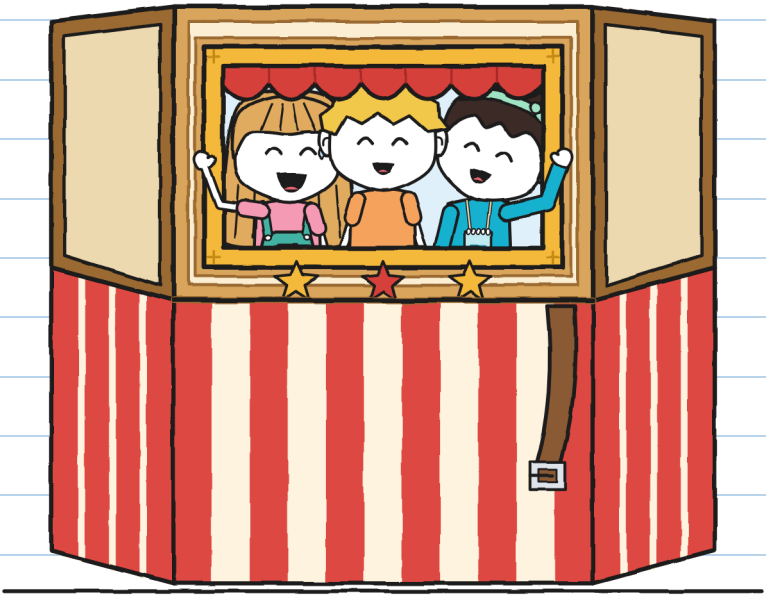
ありえない はいたつ・6

ばしょは さんにんぶん

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ S
初級・7+

ありえない はいたつ ・ 6

ばしょは さんにんぶん

文と絵 : LinguAula

サイズ S ・ 初級 ・ 7+

日本語版 : LinguAula

しょはん : 2026

© 2026 LinguAula ・ info@linguaula.com

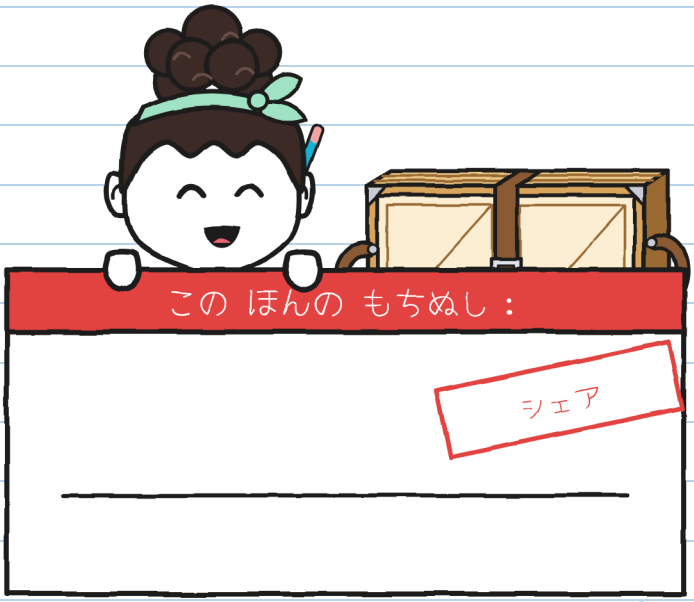
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの 6さつめ。これまでの 本は「このにもつは かみつく」「かみなり まえに あけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」「ふたりで ひとつの ケーキ」。

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

3人(ひと)で はこぶ。わたしは もう とってが ある。 —J.



シェア。みんな はいる。 —J.

見(み)つけたら、たたんで かえして ね。

おはなしの なかだけ

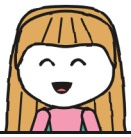
(はなし) (なか)

この はんこは、お話の 中だけで おきる ことの しるし。ほんとうの ドラゴンは いない。にもつは とんで もどって こない。ほんとうに はこぶ ときは、76ページを 見(み)てね。 —J.

だれが だれ？



グニ。センチで はかる。
こんしゅうは、ほかの ことも
かぞえる。



フリータ。みちは しっている。
せつめいは、べつの はなし。



ノア。フリータの むかしからの
ともだち。ほで はかる。ほは
いつも みに つけて いる。



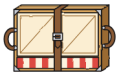
イレーネさん。げきの こうぼうを
している。どっちへ、とは
いわない。「とまれ」と いう。



トニョ。イナズマびんと、みせの
ひと。じかんを はかるだけで、
いけんは いわない。ほとんど
ね。



マラさん。にもつは かす。はこは
はなさない。



6ばん。はこに はいる ぶたい。
ベルトを だれも おさえないと、
すきな ところで ひらく。



R.は さしだしひと。こんかいは、
びひんリストに 1ぎょう
のこした。

グニの
はいたつノート6

シェア。



ノート5は、とけいに はりが 2ほん ある ところで おわった。これは みかんみたいな オレンジいろ。みせの はんこも ついて いる。

1ページ目に、ことばを ひとつ 書いた。ページの はんぶんは、ねんのため あけて おいた。1分も あいて いなかった。

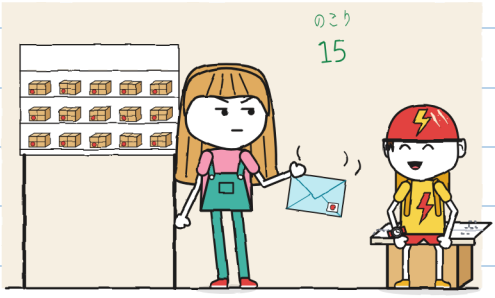
1ページ目は、わたしの 字で シェアした。 —J.

しょう
第 1 章

どうして 3にん ひつようなの？

げつようび、がっこうから かえると、カウンターで
フリータが ふうとうを もって まっていた。みどりでも
あおでも ない、ターコイズいろ。まだ あいて ない。

「ゆうびんやさんが もって きたの。『ありえない
はいたつ』あて。しばらく あけて ない」
「どのくらい？」
「28ぷんだぜ」と、トニョが とけいを みながら
いった。「この まちの きろくだ」

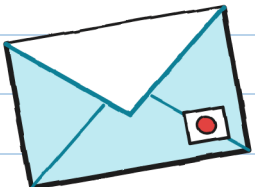


わたしのじゃ なかった。ひとの ふうとうは
3ばい おもい。 —J.

マラさんは　つめで　あけた。

イレーネです。ちいきセンターの　げきの　こうぼうの　たんとうです。
びひんリストを　こうしんして　いて、1ぎょう　みつけました：
　「おりたたみの　ミニぶたい：うけとりまち」
そちらに　ありますか？
31にちの　どようびは、まちの　ラリーです。
ミニぶたいが　たたんだ　まま　うちの　なかにわに　とどいたら、
3にんの　チームが　はこんで　きたら、その　ばで　サインします。
ノアの　チームには　さんにんぶんの　ばしょが　あり、いまは　ノアだけです。

フリータ、わたしだよ！いま、げきを　やって　いるの。
にもつに　くわしい　だれかを　つれて　きてね。　ーノア

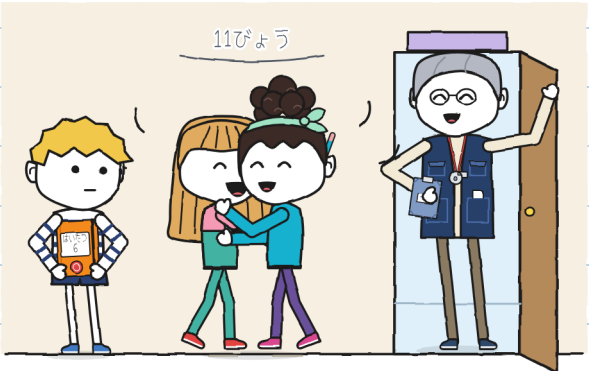


「にもつに　くわしい　だれか」。それは　ぼくだ。
「にもつ」は　うれしかった。「だれか」は、あまり。

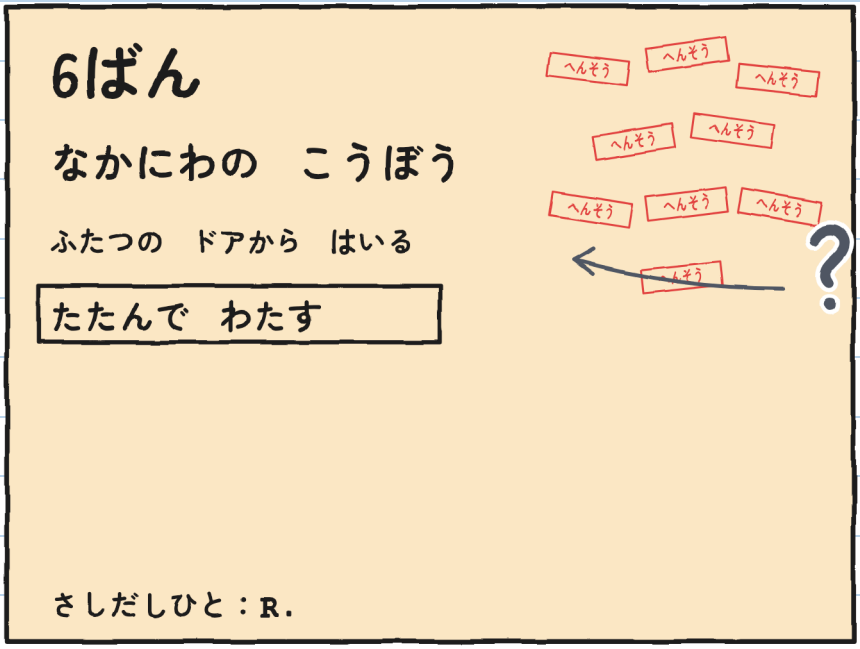
5時に、イレーネさんと ノアが 来た。イレーネさんは
ファイルと ポケットの ある ベスト、くびには
ホイッスル。ノアは メモちょうを ぶらさげ、みみに
ターコイズの えんぴつ。

フリータと ノアは、ながい あいだ だきあった。はかる
ことが できた：11びょう。ぼくは はしで ノートを
もって いた。ノートは、こういう ときの ためにも
ある。手に もつ ものが ほしい ときの。

「この 子が グニ」と フリータが 言った。
「にもつに くわしいの」
「はじめまして、にもつに くわしい グニ」と ノアは
言って、ぼくの 名前を メモちょうに 書いた。



マラさんは いすに のぼって、たなから 6ばんを
おろした。ほかと おなじ はこ。



「はんこは 9こ」と フリータが 言った。
「『ふたつの ドア』」と ノアが 読んだ。
「ふたつの ドアって？」

イレーネさんは 知らなかった。マラさんも。ぼくは
はてなマークを つけて メモした。

「9回 もって いったの」と マラさんは 言った。
「月曜日は さいほう、水曜日は コーラス、金曜日は
チェス。どこも『こうぼう？ ここじゃ ない』。
サインは だれも しない」
「げきは なかにわで れんしゅうします」と
イレーネさんは 言った。「ベルは ありません」

イレーネさんは ファイルを ひらき、はんこの
かみを 見せた。

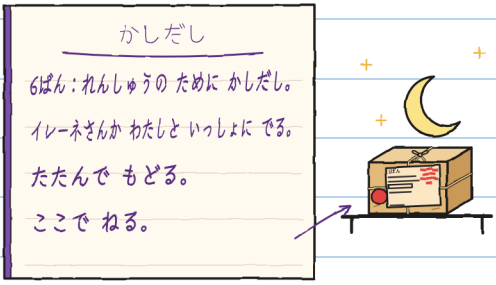
「いま、こうぼうは とうろく ずみ：『げきの
こうぼう。たんとう：イレーネ』。もう サインする
人が います」

マラさんの 9この こころみ



「サインする 人が いるなら、マラさんが はこに いれて はこべば？」と フリータが 聞いた。
「はこに いれて、もう 9回 はこんだわ」と マラさんは 言った。「これからは、うけとる 人が じょうけんを きめるの」
「ミニぶたいは ひろばへ もって いく ものです」と イレーネさんは 言った。「こどもたちが みちを はこべるか、たしかめます。はこべなければ やくに 立たず、やくに 立たない ものには サインしません」

「それ、パンやさんで 聞いたわ」と マラさんは 言った。じょうけんを メモした。ラベルは はこに つけた まま。はこは マラさんの ところ。

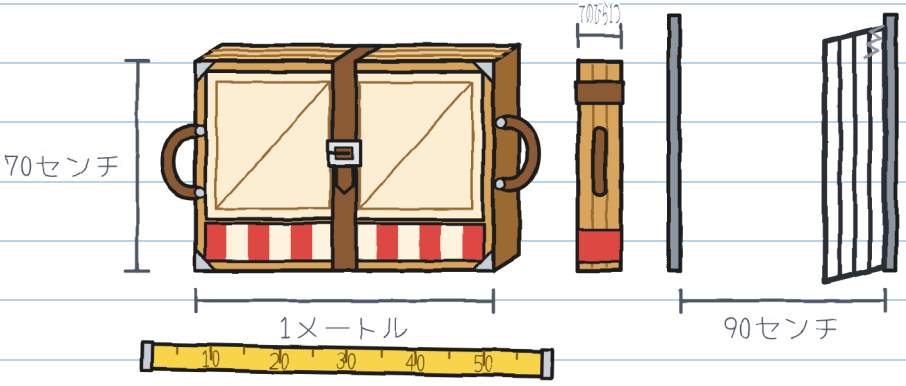


たなで ねて いるなら、夜明けに もどる ところが ない。
はんこは 9つの まま。きいて みた。 —J.

火曜日に、ちいきセンターの なかにわへ 行った。
みちから はいる ところに、てつの もんが ある。
もんは ひとりでに しまる。

マラさんは はこを ゆかに おいて、ふたを とった。
ミニぶたいは でて きて、エリアさんの だいみたいに
おおきく なった。ぼくは もう おどろかない。
まきじゃくを 出す。

6ばんの おおきさ

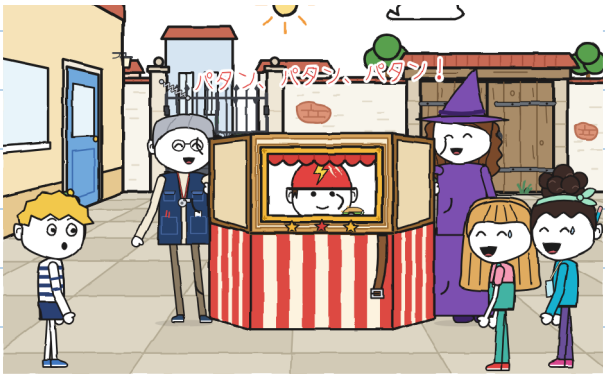


よこに 立てれば、門を 通れた。それは
かんたんな ほうだった。

イレーネさんは、ぜんぶ そろって いるか 見たかった。
ベルトを はずして、たたんだ つつみを まわした。
パネルは おもみで ひとりでに ひらいた：パタン、
パタン、パタン。3つの かべと、みじかい まくと、
おくに まどわくの ある ぶたいが できた。

まどから トニョが 見えた。サンドイッチを
もって 通りかかった。くちが いっぱいで、
あいさつ できなかった。

「ぜんぶ そろって いますね」と イレーネさんは
言った。「こうぼうの きまりです。手は とって。
ちょうつがいには ぜったいに さわらない。まがる
ときは、かならず だれかが ベルトを おさえる」



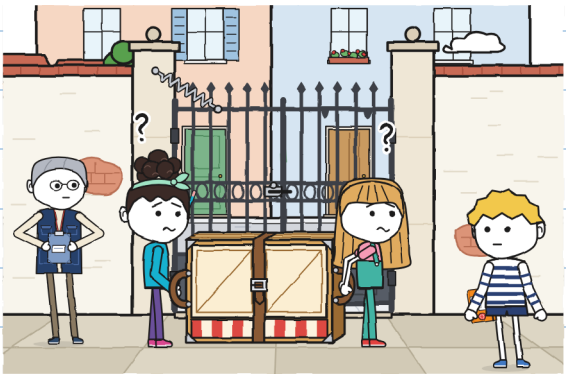
イレーネさんと マラさんは ミニぶたいを たたんで、
ベルトを とめた。

「わたしたちで ためす」と フリータが 言った。ノアは
もう もう 一つの とってを つかんで いた。

3まで かぞえて、もちあげた。もてた。なかにわを
1しゅうして、もんに ついた。もんは しまって いた。

フリータは 門を 見た。ノアも。手は ぜんぶで 4つ、
4つとも ふさがって いた。

ぼくは 2メートル はなれて、てが あいて いた。
ノートを もって いた。



ぼくは せなかで 門を おさえた。ふたりは 通った。
イレーネさんは ファイルに なにか 書いた。

その 日の 午後、ぼくは この ノートの
そうちを はつめいした。

3にんメーター

くかんごとに、だれが なにを する

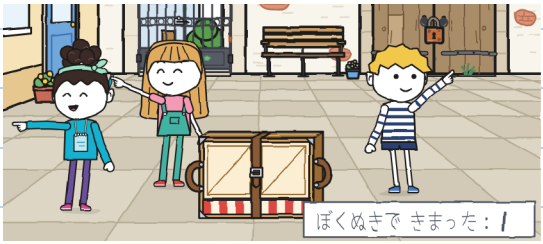
	もつ 	あんない 	みちあけ 
なかにわ、1かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ

おなじ なまえが 2つと、からの マスが 1つ：
とおれない。3つとも うまって いれば、とおれる。

もう 一つ、小さい ことも メモした：「門は、
石でも おさえられる」

まだ ラベルの いみが わからなかった。
「『ふたつの ドア』って、もんの 2まいの とびらの
ことだよ」と フリータが 言った。
「どっちも あけなきゃ」と ノアが 言った。
「さきに へいを はかれるよ」と ぼくは 言った。
3人で ゆびを さした。フリータは もん、ノアは へや、
ぼくは みち。
「あとで」と ふたりは 言った。

ぼくは ひとりで いった。へいの うらで、なにかを
みつけた。もどると、ふたりは ぼくの いない ときの
はなしで わらって いた。ぼくは くちを あけた。
「もう きまったよ、グニ」と フリータが 言った。
「2まいの とびらだよ」
ぼくは くちを とじた。ノートも とじた。



その ぼうせんは、2日 あとに 見た。わたしの。 —J.

しょう
第 2 章

だれが みちを しって いる？

すいようび
水曜日は、はじめての ルート：おみせから
なかにわまで、みちを 歩く。ぼくが ついた とき、
メーターは もう うまって いた。みどりで。

「グニと ノアが もつ」と フリータが 言った。
「わたしは あんない。みちを しって いるから。それに
まえを 歩くから、みちあけも する」
「ここへ 来る とちゅうで かんがえたの」と
ノアが 言った。

みどりで 書いた ものは きえない。2本めの ぼうせん。

3にんメーター

	もつ	あんない	みちあけ
なかにわ、1かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ
みせ → なかにわ	グニと ノア	フリータ	フリータ

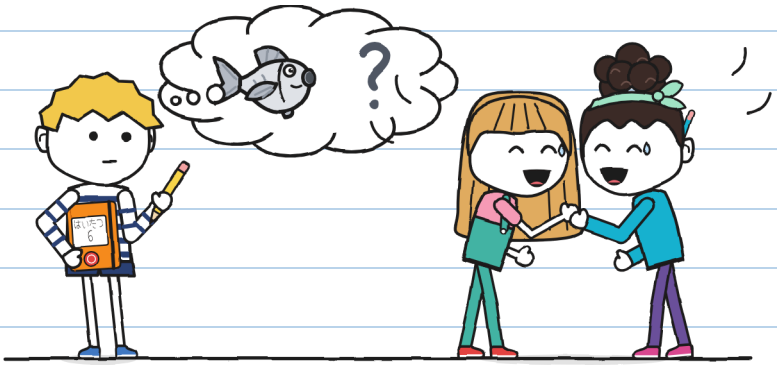
ぼくぬきで きまった：11

「でかける まえに、ちずを つくらない？ まがる
ところに ばんごうを つけて」と ぼくは 言った。
「ちずは いらないよ」と フリータが 言った。
「かたひれの さかなまで、ずっと まっすぐ」

ノアが わらいだした。フリータも。

「どの 魚？」
「かたひれの 魚は、かたひれの 魚」と
ノアが 言った。
「長い 話だよ」と フリータが 言った。
「しかも、すごく いい 話」と ノアが 言った。

その 話は 聞けなかった。3本めの ぼうせん。



マラさんは みせの いりぐちで、はこから ミニぶたいを
出した。ノアは ベルトを 1つめの あなに とめた。

「こう して おくと、なかにわで はやく はずせる」

ぼくが まえで、ノアが うしろ。まえは みちが
見える。うしろは ミニぶたいしか 見えない。
イレーネさんは いちばん うしろで、ファイルと
ホイッスルを もって いた。どっちへ、とは 言わない。
だんさの たびに「とまれ」と 言った。

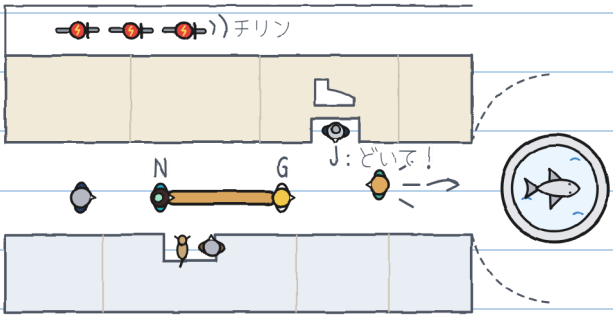


フリータは みちあけが とても うまかった。

「どいて どいて、ぶたいが 通(とお)るよ！」

くつやさんが 見(み)に でて 来(き)た。いぬを つれた
おじさんが、げんかんの ところで まって いた。
とおくの、まちの はんたいがわで、ベルが
鳴(な)った。チリン。

「イナズマが コースの れんしゅうを して いるの」と
ノアは 言(い)った。「むこうは じてんしゃで ふうとうを
はこぶ。わたしたちは あるいて、これを はこぶ」
「これを もって はしっては いけません」と
イレーネさんは 言(い)った。

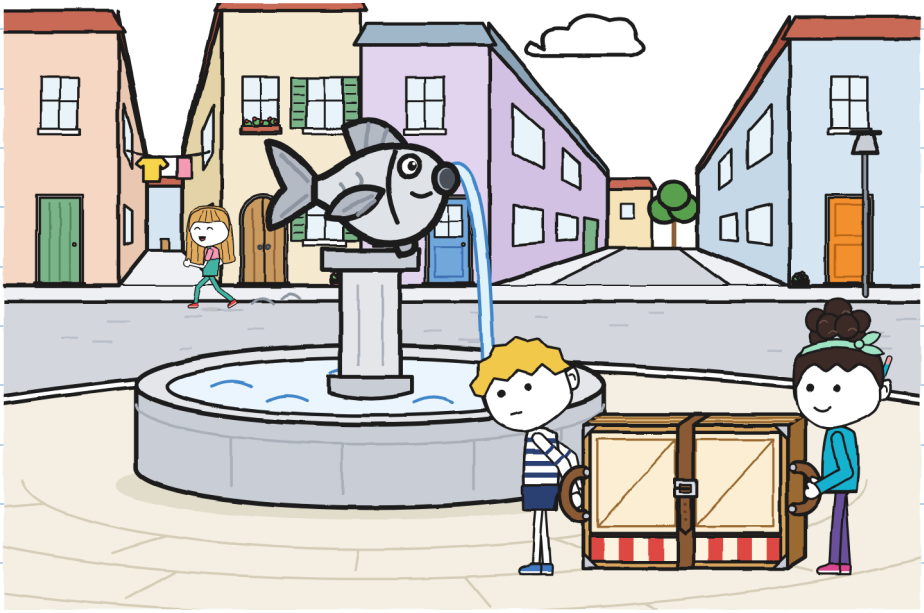


ふんすいの ひろばに ついた。フリータは ふりかえって しじを さけぶと、センターへ はしって いった。もんを おさえる ために。

「かたひれの 魚(さかな)まで、そして まがる！」

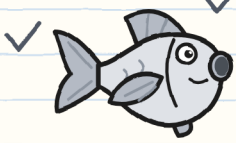
そして もう いなかった。

ふんすいの まんなかに、石(いし)の 魚(さかな)が ある。よく 見(み)た。ぼくの がわからは、ひれが ぜんぶ あった。

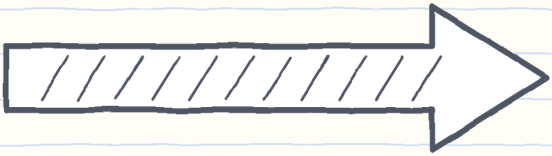


はやく かんがえた。ぼくの とくいじゃ ない。

ふんすいの 魚：ひれは 見える 分 ぜんぶ。
かたひれ じゃ ない。
べつの さかなが いるはず。



まがる：どっちへ？
ひだり、せまい みち
みぎ、ひろい みち
ミニぶたいには 広い 道が いい

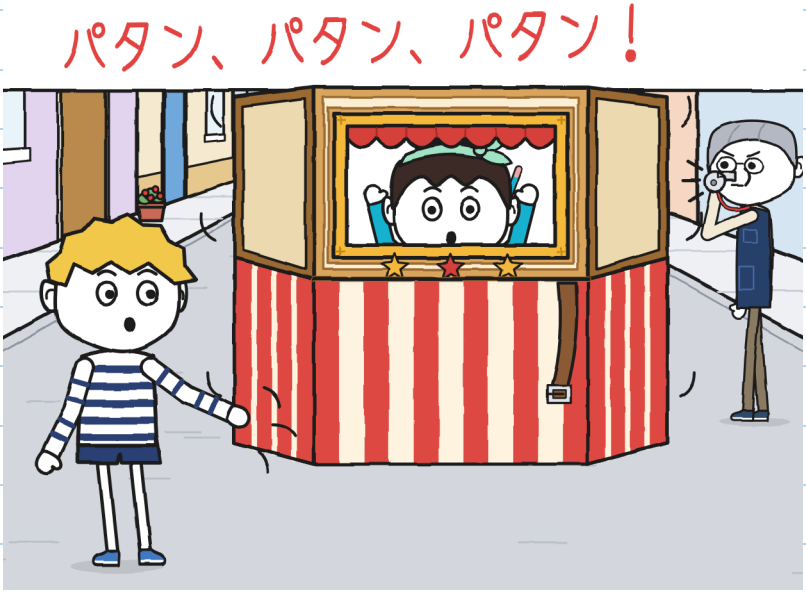


「もう まがる？」と ぼくは 後ろに むかって 聞いた。
「かたひれの 魚で！」と ノアが ミニぶたいの
後ろから 言った。

べつの 魚を さがしつづけた。いなかった。ぼくは
右へ まがった。

だれも「まがるよ」と 言わなかった。だれも ベルトを おさえなかった。1つめの あなの バックルは、
あまり もたない。
パタン。パタン。パタン。

パネルは ノアの まわりで、ゆっくり、ひとつずつ ひらいた。イレーネさんは ホイッスルを ふいた。
そして みちの まんなかに、ぶたいが あった。ぶたいの なかには ノア。
「こんにちは」と、ノアは まどから 言った。

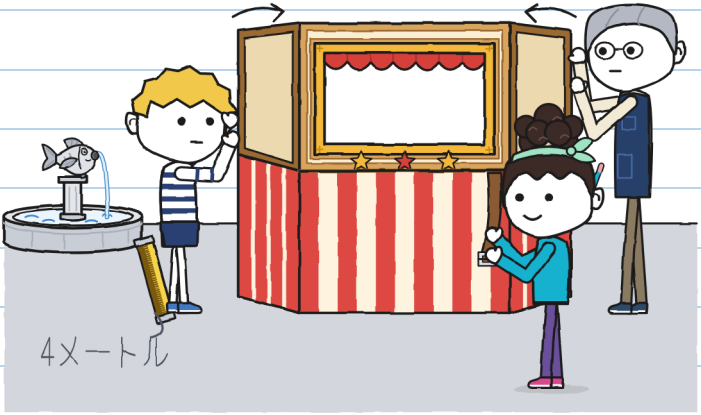


イレーネさんは ノアの 手を 見た。つぎに
ぼくの。みんな ぶじだった。パネルは かるくて、
ゆっくり ひらく。

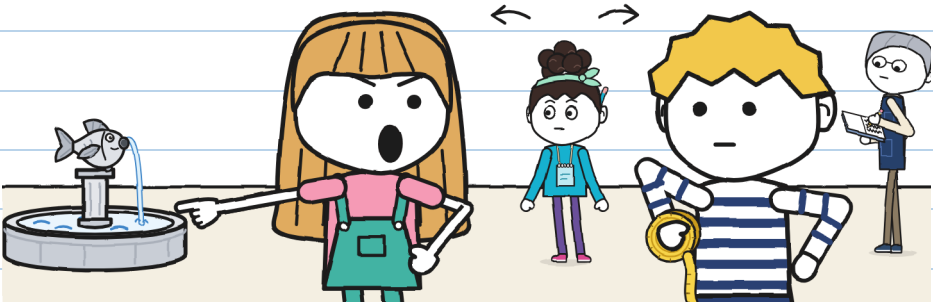
「だれが あんないして いたの？」と
イレーネさんが 聞いた。

だれも こたえなかった。あんないは フリータ。
2ブロック さきで もんを おさえて いた。

イレーネさんと ぼくは、木の よこぼうに 手を かけて
ミニぶたいを たたんだ。はかった：ぼくの あしから
ふんすいまで、4メートル。



フリータが 走って もどって 来た。
「だって、かたひれの さかなの
ところって 言ったでしょ！」
「どの かたひれの さかな？」
「あれ！ ひだりへ。いつも の とおり」
「『いつも』は、ぼくが いなかった ころの こと」
フリータは イレーネさんの ほうを むいた。
「グニが まいごに なったの」
ぼくは まいごじゃ なかった。どこに いるか
わかって いた：ふんすいから 4メートル。さっき
はかった ばかりだ。
それも ぼくぬきで きまった。4本めの ぼうせん。



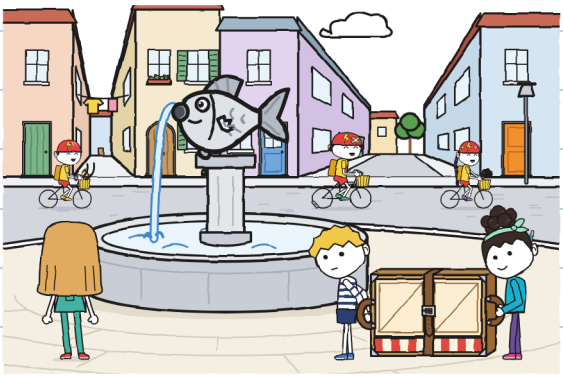
大きな 声で、人の 前で 言った。わかって いる。 —J.

さかなの はんたいがわを 見(み)せて もらった。ひれが
ひとつ ない。ひだりの ひれ。ないと わかって
いないと、気(き)づかない。

くかんの まがりを もういちど やった。1回目(かいめ)は
「まがる」が 早(はや)すぎ、2回目(かいめ)は おそすぎ。3回目(かいめ)は
できたけど、だれも しゃべって いなかった。

そこへ イナズマが 通(とお)った：ゾエ、ブルーノ、トニョが
1れつで。かどで チリン。ブレーキも かけず、
ぶつからず、ふんすいを ひとまわり。

「チェックポイント1、1かいで クリア」と、トニョが
通(とお)りながら 言(い)った。



なかにわに ついたのは、もう くらく なる ころ。
マラさんは ミニぶたいを はこに しまって、
みせに もちかえった。

きょうの ことを メーターに メモした。3つの マスに
なまえは はいって いる。それなのに、みちで ぶたいが
ひらいた。メーターには、なにかが たりなかった。
なにか、わからなかった。

3にんメーター

	もつ	あんない	みちあけ	
みせ → なかにわ	グニと ノア	フリータ	フリータ	
店 → ふんすい	グニと ノア	フリータ	フリータ	ひらいた ・ やりなおし 3回

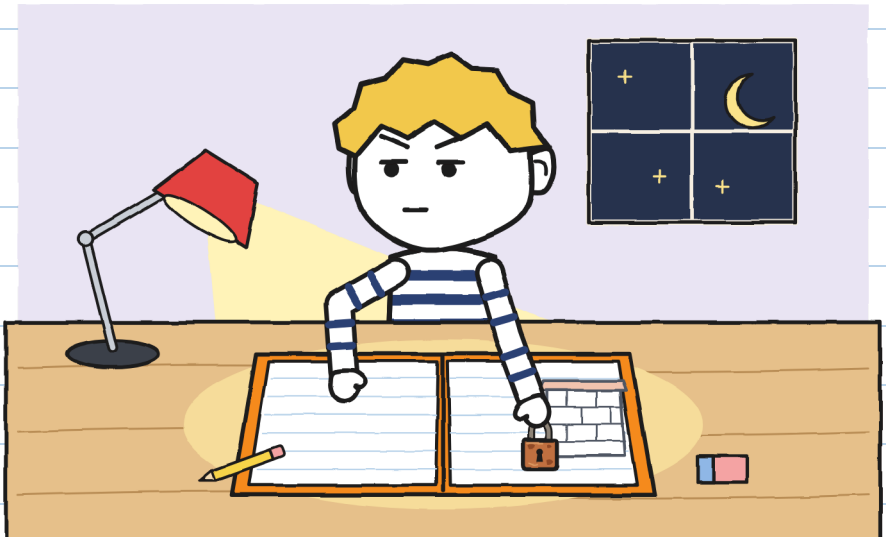
?

ぎょう　なまえ　かい　で　かい
その 行に、わたしの 名前が 2回 出て くる。2回とも、
わたしは そこに いなかった。 —J.

家で、さいごの ページに、火曜日に へいの
うらで 見つけた ものを かいた。ひとりなのに、
手で かくした。

かんがえた：「あした また しっぱいする。そしたら
これを だす」

いい けいかくだと おもった。じかんまで
きめて いた。



この ページは、木曜日に 読んだ。すきじゃ なかった。
水曜日に わたしが 書いた ページも。 —J.

第3章

グニの ちずは やくに たつ？

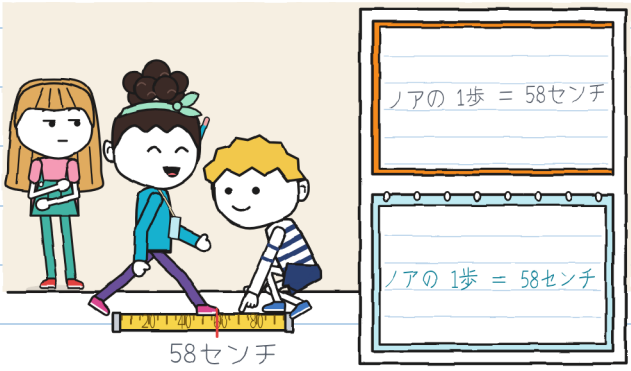
その 夜、地図を ぜんぶ 作った。上から 見た
なかにわ、はかった へい、門、ふんすい、3つの
くかん。そして うらには、火曜日の こと。

とても いい 地図が できた。4つに おって、
ノートに はさんだ。



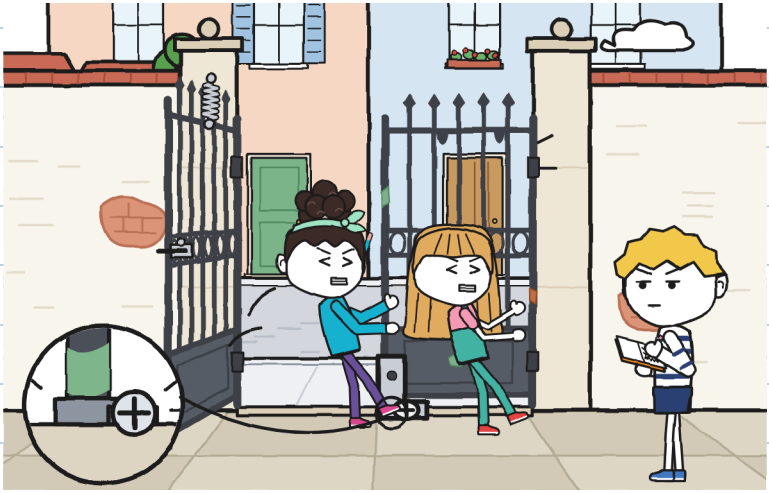
木曜日、みせで ノアが 歩を かぞえて いた。
「ドアから だんさまで 6歩。だんさから
がいとうまで 11歩」
「それは まきじゃくで はかる ものだよ」と
ぼくは 言った。
「わたしは 歩で はかるの。歩は いつも みに
つけて いるから」

ノアの 1歩を はかった：58センチ。ノアは それを
メモちょうに 書いた。ぼくは ノートに。フリータは
ぼくたちを 見て いた。おなじ じこくを さす 2つの
とけいを 見る みたいに。
ノアは もう ひとりの フリータに なると 思った。
ちがった。ノアは かぞえる。



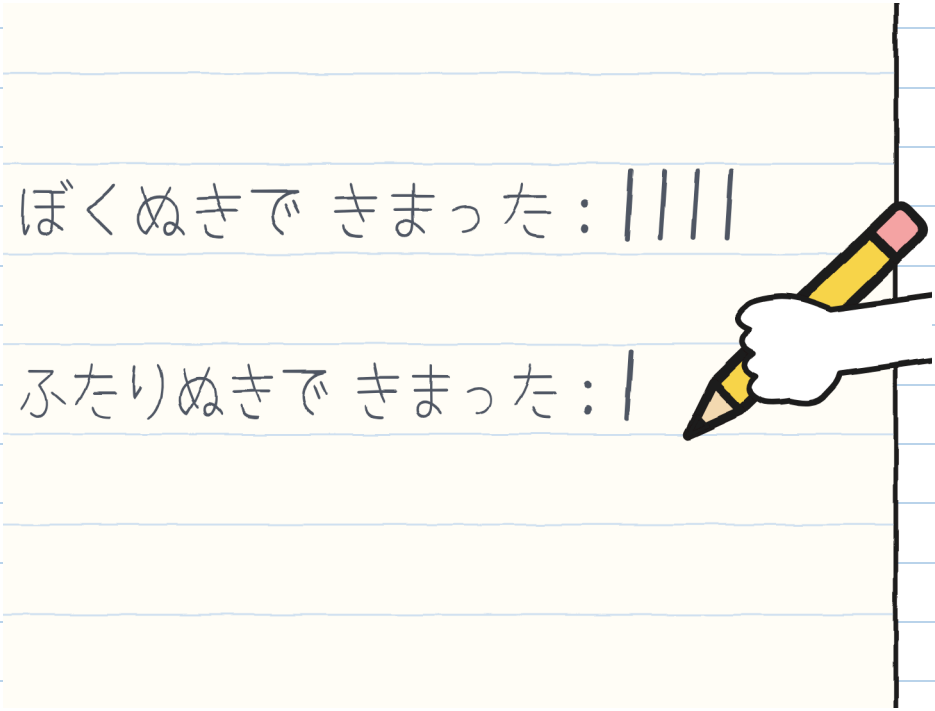
イレーネさんと なかにわへ 行った。フリータと
ノアは、じぶんたちの かんがえを ためしたかった：
もんの 2まいの とびらを あける こと。
1まいめの とびらは ひとりでに あいて しまる。
2まいめは あかなかった。ペンキで はりついて いて、
じめんに ネジで とまって いる。

「じゃあ、ラベルが まちがってる」と
フリータが 言った。
「ぜったい」と ノアが 言った。
2びょうで きまった。ぼくは ぼうせんの ために
えんぴつを 出した。5本めだった。



かかなかった。

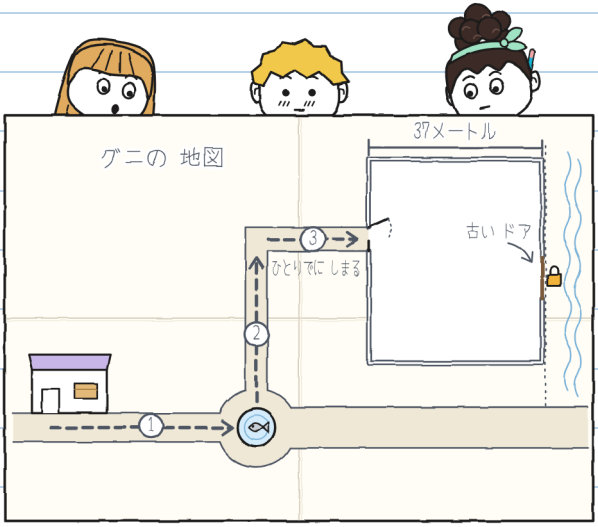
ぼうせんの れつを 見(み)た。1ほん たりなかった。
ぼくの。火曜日(かようび)、へいの うらで、ぼくも だれにも
きかずに きめた。だまって いる ことに。



「ラベルは まちがって ない」と ぼくは 言った。
おもったより 大きな こえだった。「なかにわには もう
ひとつ ドアが ある。うらの、うんがの ろじに。
ふるくて、かぎが かかって いる。火曜日に みつけた」

ぼくは 地図を とりだして、ミニぶたいの
上で 広げた。

「火曜日？」と フリータが 言った。
「火曜日。あとで 正しかったと 言う ために、
とって おいた」



しばらく だれも なにも 言わなかった。はかって
みた：ながかった。
「わかった」と ノアは 言って、ドアを じぶんの
ちずに うつした。
フリータは「わかった」と 言わなかった。あしを
ゆらして いた。
「きのうは あれが すごく ひつようだった」
「うん」

なかにわには かくれる ところが ない。さがしても
いない。ぼくは ちずを ひらいた まま、たって いた。



「わかった」と 言わなかったのは、まだ
ほんとうじゃ なかったから。 —J.

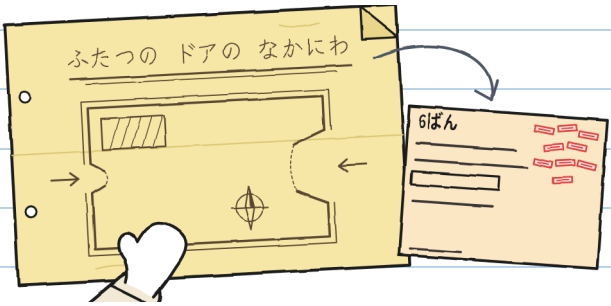
イレーネさんと ドアを 見に 行った。ノアは へいを 数えた：64歩。ぼくは さきに はかって いた：37メートル。おなじ だった。

ふるい ドアは 木で できて いて、2まいの とびらが あり、きょじんの ベッドくらい 広い。ロックは、ロックより さびの ほうが 多い。

「何年も しまった ままです。わたしは ずっと このままの すがたしか 見た ことが ありません」と イレーネさんは 言った。



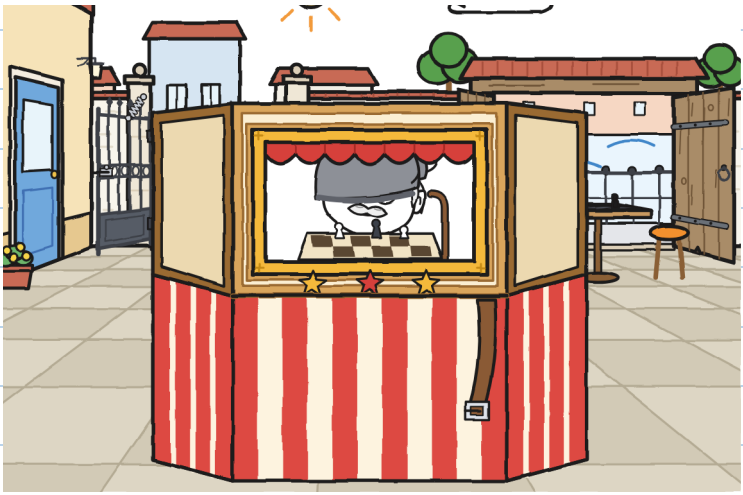
イレーネさんは センターの とうろくを さがした。
きいろい かみが 見つかった。
「ここに あります。この ドアが つかわれて いた
ころ、なかにわには 入口が 2つ ありました：門か、
ここです。なかにわは『ふたつの ドアの なかにわ』と
よばれて いました。そして どの グループの 中でも、
なかにわで れんしゅうして いるのは げきだけです」
「じゃあ、ラベルは なぞなぞじゃ ないんだ」と
ノアが 言った。
「じゅうしょだよ」と ぼくは 言った。
『なかにわの こうぼう。ふたつの ドアから はいる』。
ちゃんと 書いて あった。ただ、古かった だけ。



あとで マラさんは、その ロックを 9回 見たと 言った。
しまった ドアは 数に 入らないと 思って いた。 —J.

かぎは ファイルの ふうとうに はいって いた：
『ふるい ドア。なくさない こと』。イレーネさんが
ロックを あけた。ドアは ふねの きしむ ような
おとを たてた。

なかにわでは、チェスの 人たちが テーブルを ひなたに
出して いた。イレーネさんは まんなかで ミニぶたいを
ひらいた。ふたつの ドアの あいだに どれくらい
ばしょが あまるか 見たかった。たっぷり あまった。
ミニぶたいの まどから、ベレーぼうを 目の 上に
のせた アントニオさんが 見えた。つぎの 一手を
考えて いる。すこし いびきを かいて いた。



「土曜日は 2つとも あけます」と イレーネさんは
言った。「じてんしゃは ふるい ドアから、うんがの
ろじから 入ります。にもつを もって 歩く 人は
もんから。そうすれば ぶつかりません」
「でも ふるい ドアの ほうが 広い」と フリータが
言った。「それに、ひとりでに しまらない」
「もんは あなたたちの ものでしょう。こうぼうが
ミニぶたいを 広場へ はこぶなら、もっと ひどい
ドアも ありますよ」
フリータは 口を あけた。ノアを 見た。ぼくを 見た。
「グニは どう 思う？」
1週間で はじめて だった。ぼくは 日づけと
いっしょに メモした。



ぼくは、門(もん)が いいと 言(い)った。ただし れんしゅうして から。ノアも おなじ。フリータは「わかった」と 言(い)った。こんどは はんぶん ほんとうだった。

あとで メーターを なおした。3つの マス(た)は、水曜日(すいようび)の ことにも ぼくの ことにも やくに 立たなかった。

3にんメーター（4つめ つき）

	もつ 	あんない 	みちあけ 	しらせ 
なかにわ、2かいめ	フリータと ノア	フリータと ノア	グニ	グニ、なし
店 → ふんすい	グニと ノア	フリータ	フリータ	だれも

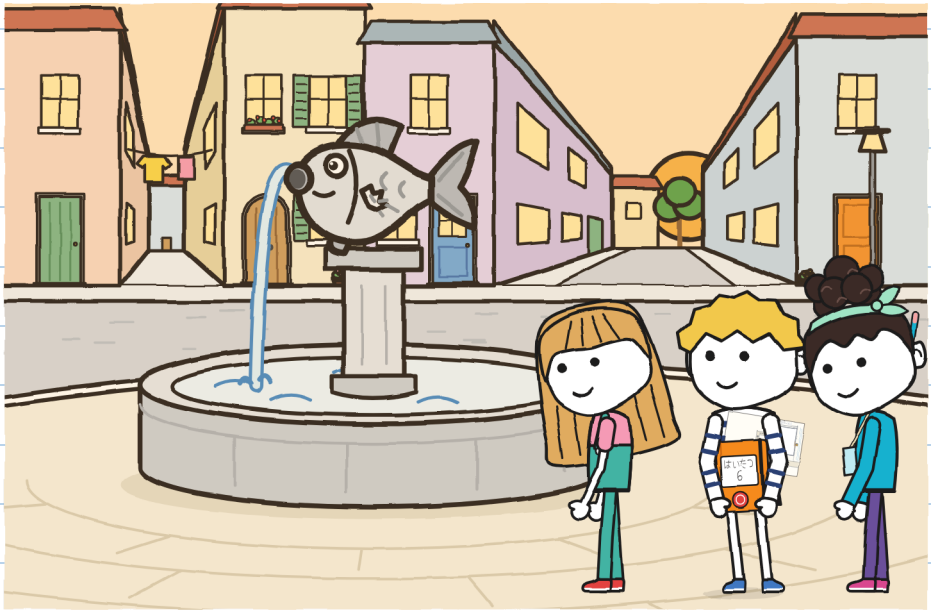

しらせ：しって いる ことを 言う

3にんメーターには マスが 4つ ある。もんくは ない。
4つめが いちばん むずかしい。 ーJ.

ふんすいを 通って もどった。ぼくは さかなの 前で
立ちどまった。ひれの ない がわで。

「その 話、おしえて くれる？」
「長い 話だよ」と フリータが 言った。
「土曜日に」と ノアが 言った。「たどりつけたら ね」

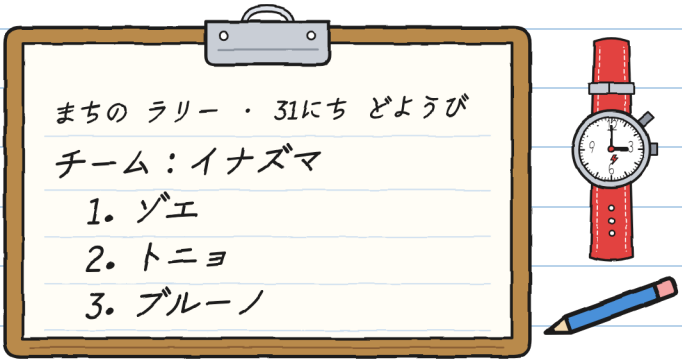
「いや」じゃ なかった。ぼくは ちずを
ノートに しまった。こんどは おらずに。ちずが
半分 のぞいて いた。



第4章

だれでも あんないできる？

金曜日、トニョが みせに 来た。時計と えんぴつと、イナズマの かみを もって いた。



「書いたのは ゾエ」と トニョは 言った。「ブルーノが なまえを 言ったんだ：『ブルーノ、てんてん つき』」

「ゾエは？」

「ブルーノと 書いた。てんてん つきで」

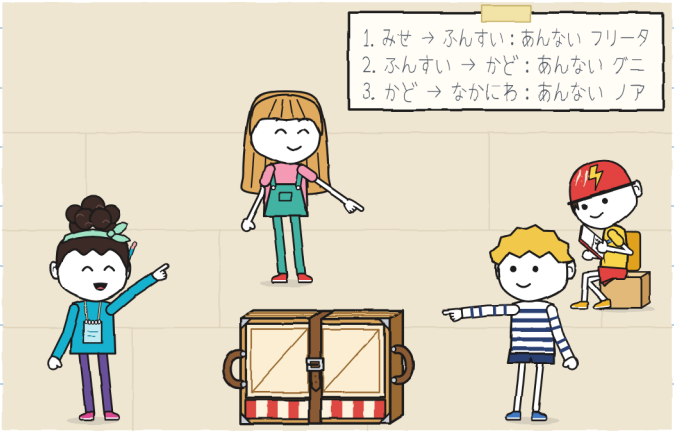
トニョは はこに すわって、とけいを ゼロに した。

「きょうは じかんを はかる。いけんは 言わない。やりなおした ことを メモする」

ノアの 考え：じゅんばん。3つの くかんで、
くかんごとに あんないする 人が かわる。ぼくの
考え：もたない 人が あんないと みちあけを する。
ほかの 2人は ミニぶたいしか 見えない から。
フリータの 考え：もう はじめる。

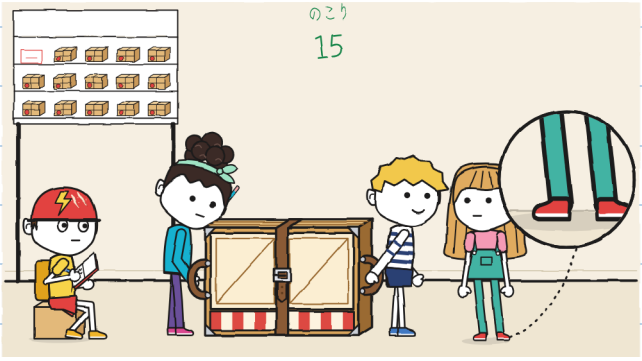
「1つめの くかんは だれが あんない？」
3人が いっせいに ゆびを さした。みんな ほかの
人を さした。

トニョが メモした。イレーネさんは ファイルを
もって 入口で まって いた。イレーネさんも
いけんは 言わない。



ミニぶたいを もちあげる 前に、フリータが 言った。
「ひとつ 言うね。水曜日、ノアしか わからない
しじを 出した。それから『グニが まいごに
なった』って 言った」
それだけ だった。それだけで ぜんぶ 入って いた。

「わかった」と ぼくは 言った。ノアから ならった。
「さかなの どっちの がわに ひれが ない？」と
ぼくは 聞いた。
「ひだり。来る ほうから 見て。ふんすいで 左に
まがる。5歩 前に 知らせる」
「それなら ちゃんとした しじだ」



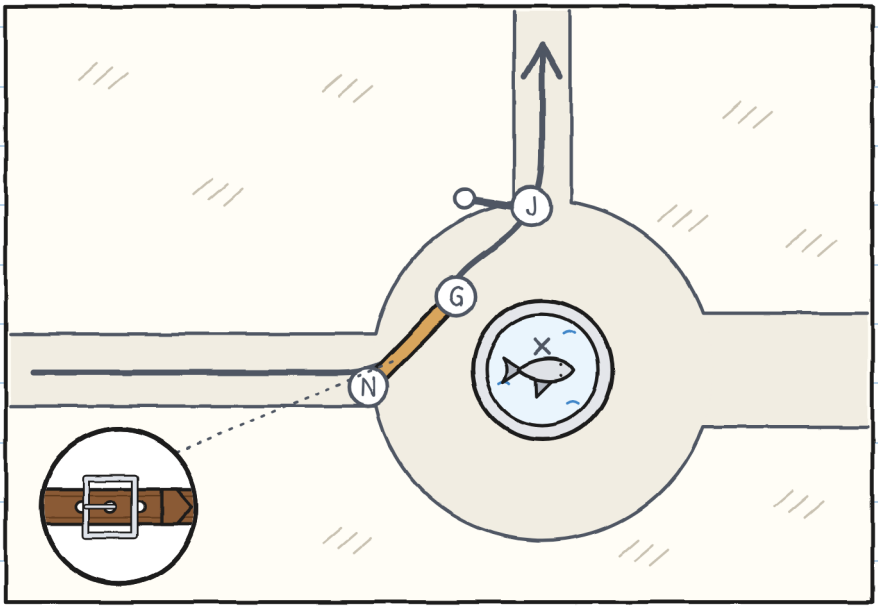
りょうほうの あしが とまって いる。
絵で たしかめて。 ー J.

くかん1。ノアは ベルトを 2つめの あなに とめた。

「5歩… 左に まがるよ！」
「ベルト！」と ノアが 言って、ベルトを おさえた。

かたひれの 魚の まわりを まわった。いつも して いる みたいだった。パタンは なし。

「くかん1：6分」と トニョが 言った。
「やりなおし：なし」

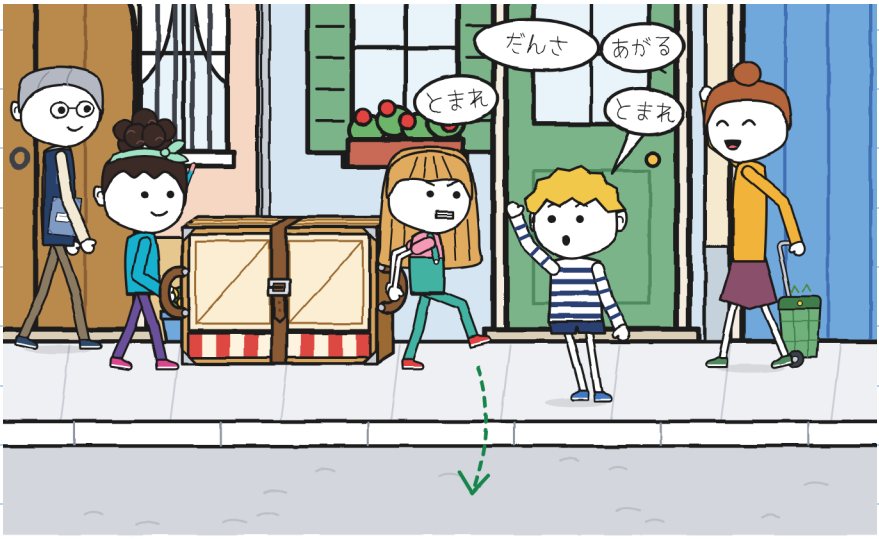


くかん2、ふんすいから かどまで。フリータと ノアが もって、ぼくが あんないした。

ぼくの あんないは こう：

「3歩。とまれ。だんさ。あがる。2歩。とまれ。女の人。こんにちは。女の人が 通る。4歩」

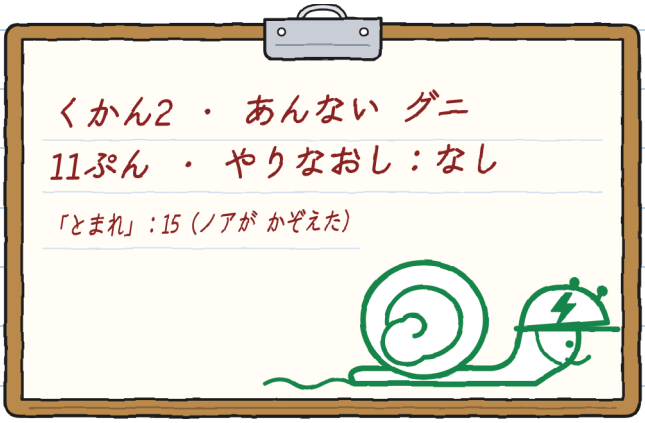
フリータは とっての ところで、だまって 前を 歩いた。足が 近道の ほうへ 行きたがる。フリータは それを ぼくの みちに もどした。



「くかん2：11分」と トニョが 言った。「こんなに
おそいのは はかった ことが ない。やりなおし：なし」

ぼくが なにかを あんないした のは はじめて だった。
そして やりなおしは なにも なかった。

「『とまれ』を 14回 言ったね」と
フリータが 言った。
「かぞえたよ」と ノアが 言った。「15回」
「6回は いらなかった」と フリータが 言った。「でも
ぜんぶ 止まったよ」



どれにも さからわなかった。はを
くいしばりすぎて いたかった。 —J.

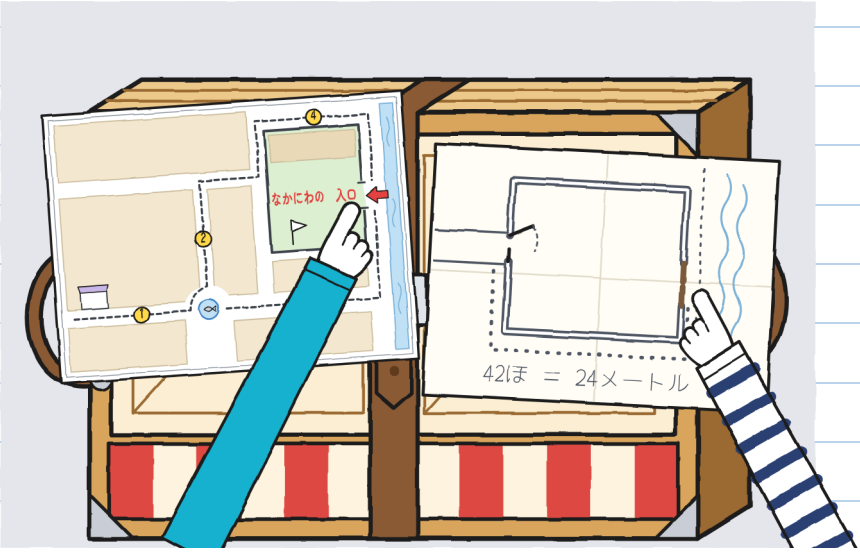
くかん3、かどから なかにわまで。フリータと ぼくが
もった。ノアは ラリーの ちずで あんないした。
イレーネさんが ぜんぶの チームに 1まいずつ
くばった ものだ。

ノアは 20歩(ぽ い) 行った ところで 立(た)ちどまった。うんがの
ろじの はじまる ところ。
「合(あ)わない」
「なにが？」
「ちずは ここへ 来(こ)いって。ふるい ドアへ。
わたしたちは 門(もん)から 入(はい)る。はんたいがわ」



ミニぶたいを じめんに おろした。まず おろす。
はなしあうのは それから。
ぼくの 地図を ノアの 地図の よこに ならべた。
ラリーの 地図には 入口が 1つしか かいて ない。
門じゃ ない。ふるい ドアだ。
「ふるい 地図だよ」と ぼくは 言った。「あそこから
入って いた ころの」

そこから 門まで、ノアの 歩で 42歩。ぼくの はかった
ので 24メートル。ノアの 歩と ぼくの まきじゃくが
あれば、町じゅう はかれる。



「イレーネさんに 言う？」と フリータが 聞いた。
「ほかの チームにも」と ノアが 言った。
「そうしないと、歩いて 来る 人は みんな うんがの
ろじに 入っちゃう。じてんしゃと いっしょに」
ぼくは なにも 言わなかった。さんせいだった。

イレーネさんは ちずを 1まいずつ、あかい ペンで
なおした。トニョは じぶんのを 見た。
「イナズマは ちずの とおりに 入る つもりだった」
「あなたたちは そこから 入ります」と イレーネさんは
言った。「じてんしゃなら、ちずで 合って います。
たまたま ですが」



かどへ もどって、くかん3を もう いちど やった。
こんどは 門まで。フリータと ぼくが もった。
ノアが あんないして、みちを あけて、知らせた。
ぜんぶ いっしょに：

「とまれ！ とびらを おさえてる！ 通って！」

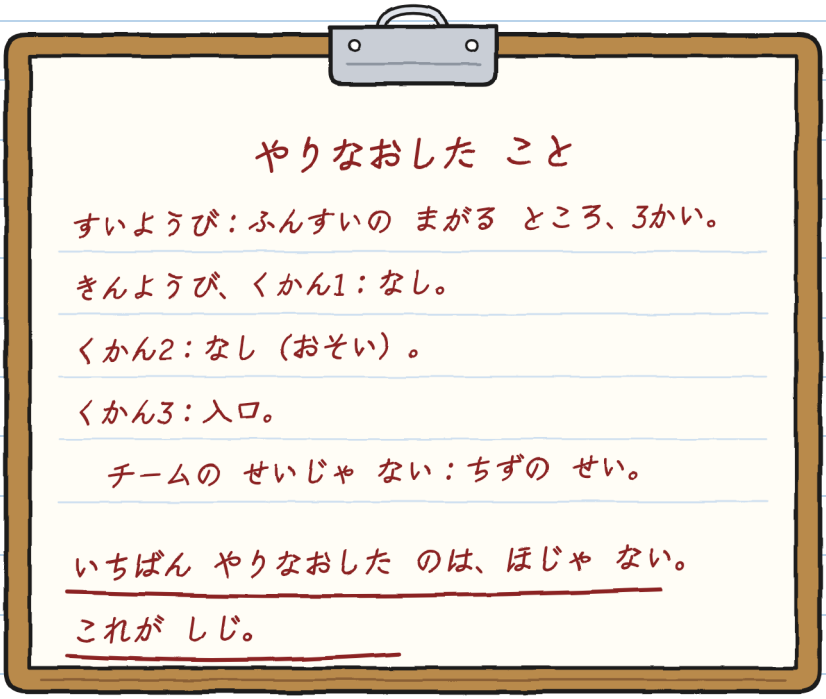
通れた。ぼくは メーターを うめた。

	もつ	あんない	みちあけ	しらせ
かど → なかにわ	グニと フリータ	ノア	ノア	ノア：「ちずが まちがっている」

マスが ぜんぶ うまった はじめての 行。4つめ、
しらせの マスは ノアが うめた。

門は おもい。ノアは せなかで おさえた。あなたが
火曜日に した みたいに。メモは わたしが する。
あなたは しない。 —J.

トニョが かみを 見せて くれた。



「それは いけんだよ」と フリータが 言った。
「データだよ」と トニョは 言った。「イナズマでは、みちを まちがえて 言うと 2回 そんする。
いきも かえりも」

トニョは ヘルメットを かぶって、れんしゅうに 行った。チリン。

夜、店で マラさんは ミニぶたいを はこに しまった。
ノアは バックルを 見た。

「あしたは 3つめの あなに。はずすのに 時間は
かかるけど、それで いい」

ノートの すみ、ぼうせんの ところを ひらいた。
きょうは ひとつも 引かなかった。もめごとは 4つ。
ぜんぶ 声に 出して 言った。ぼくが かったのは 1つ。



きみが かったのは、もめる 前に ミニぶたいを ゆかに おく
ほうだよ。それは あげる。 —J.

第5章

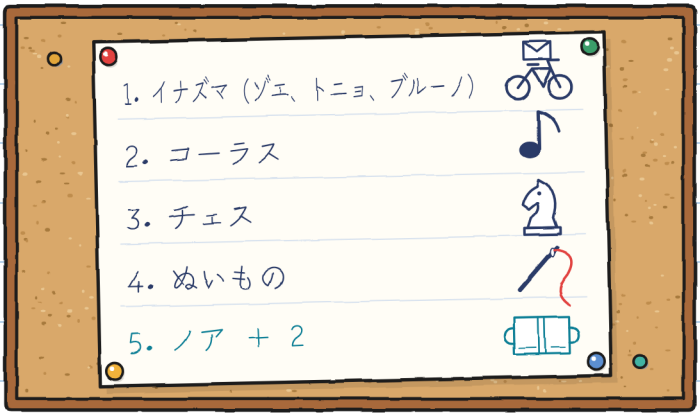
いちばんに つかなくて いいの？

土曜日に、土曜日の オレンジの Tシャツを きた。
「ノートと おそろいだね」と フリータが 言った。
11時に、なかにわの ドアは 何年ぶりかで
ふたつとも あいて いた。人は どちらからも 入って
くる。イレーネさんは ホイッスルを もって、
きまりを 言った：
「どの チームも、にもつを ここまで はこぶ こと。
ぜんぶの くかんを 通って。にもつを もったら
はしらない。はしったら、その くかんは やりなおし。
やりなおさなければ、時間を かせげる」



5チーム いた。イナズマは ふうとうを もって、
じてんしゃ。コーラスは がくふだい。チェスは
おおきな ばん。ぬいものは くびの ない マネキン。

ぼくたちの チームは、月曜日に ノアが 書いた。ぼくを
知る 前に：



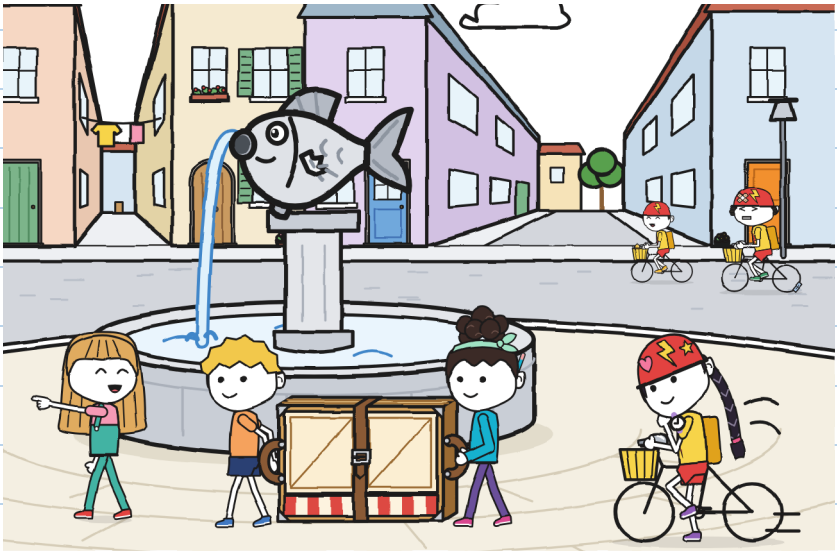
「ぼくたちは『ノア＋2』だね」と フリータに 言った。
「わたしが 2」と フリータは 言った。「あなたは
『＋』ね」

どの チームも、にもつが ねむって いる ドアから
出た。アントニオさんが しゅっぱつの あいずを した。
近くに すんで いて、はしらないから。

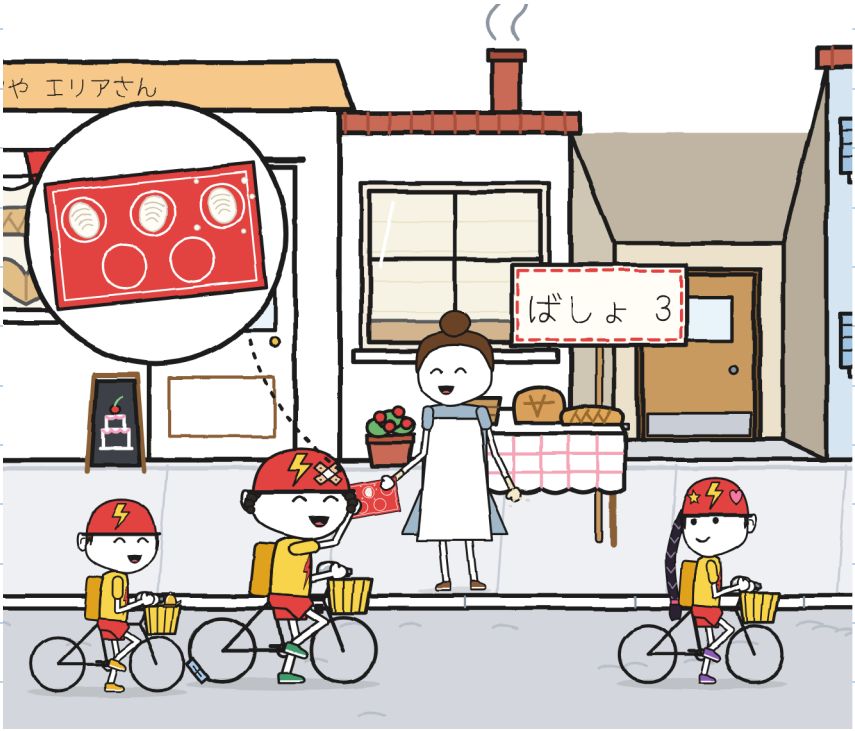
マラさんが ミニぶたいを 出した。ノアは いそいで
ベルトを とめて、3人で もちあげた。カチッ！ 1まいの
かべが ひらいた。
「ゆかに！」と ぼくは 言った。
だれも もめなかった。ノアは もういちど ベルトを
ゆっくり とめた。3つめの あなで。2回 ひっぱった。
アントニオさんが ベレーぼうを 下げた。
スタートの はただ。
「ゆっくり」と 言った。「そうして つくんだ」



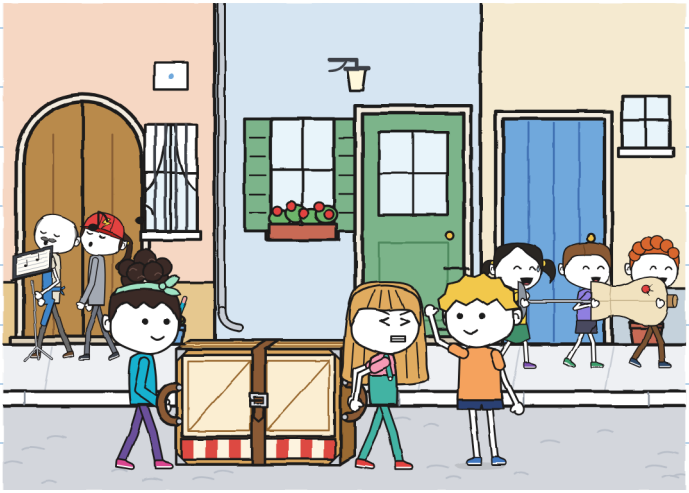
くかん1。フリータが あんない。
「5歩… 左に まがるよ！」
「ベルト！」
ぼくたちは かたひれの 魚の まわりを ゆっくり
まわって、かどを ぜんぶ ふさいで いた。ゾエが
じてんしゃで 来た。いちばん 先だった。ブレーキを
かけて、足を じめんに ついた。
「先に どうぞ。それじゃ はしれないでしょ」
ゾエは ぼくたちが かどを 出る まで まって、それから
行った。ぼくたちは 20びょう 先に いた。ゾエが
じぶんで はかった。



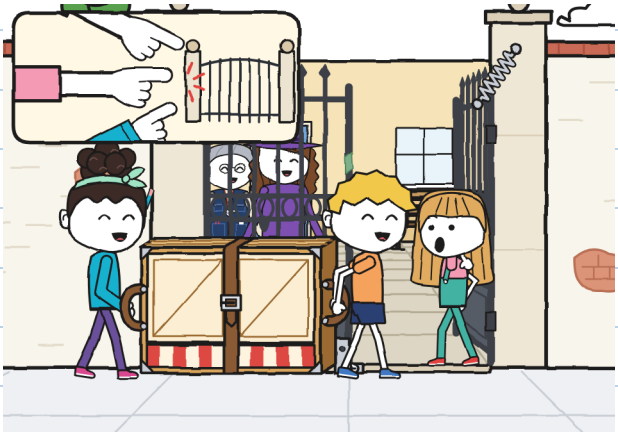
どの ばしょでも カードに スタンプを おして
くれた。パンやでは、エリアさんが こなだらけの
おやゆびで おした。
イナズマは 3回 ぼくたちを ぬいた。いつも べつの
道で。トニョは りょう手で ハンドルを にぎって、
かどで ベルを ならした。ブルーノが ふうとうを
もち、ゾエは どの ばしょでも まって いた。3人
そろう まで、カードに さわらなかった。



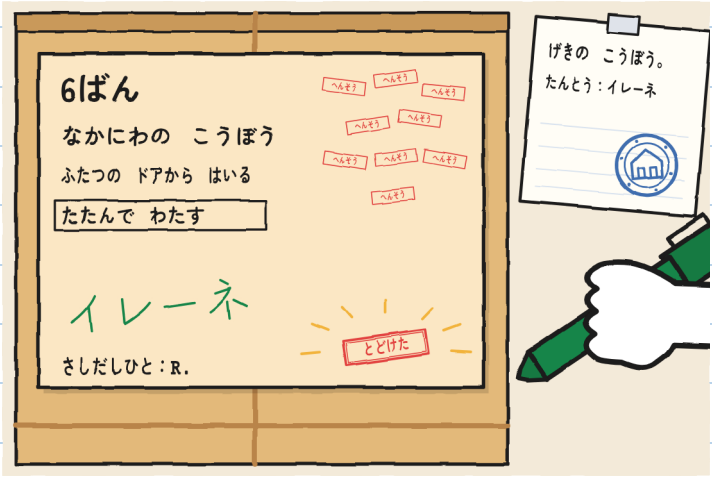
くかん2で、コーラスが がくふだいを もって
ぼくたちを ぬいた。はしって。イレーネさんの
ホイッスルが 鳴った。コーラスは ふんすいに
もどって、小さな 声で うたった。
チェスも ぼくたちを ぬいた。マネキンまで
ぼくたちを ぬいた。
フリータは はしらなかった。いや、足が ひとりでに
出た。ひきもどした。
「いちばんに つかなくて いいの？」
「ラベルに『いちばん』とは 書いて ないよ」と ノアが
言った。「『たたむ』と 書いてある」
「ふちいし」と ぼくは 言った。



くかん3。ノアが とびらまで あんないした。そこで
ミニぶたいを ゆかに おいた。
「だれが あける？」と フリータが 聞いた。
そして まった。
3人いっせいに ゆびさした。3人とも おなじ ところ。
ノアは とびらを ゆびさした。フリータも とびら。
ぼくも とびら。3人で わらった。これじゃ だれが
あけるか きまらない。
「きみが」と ノアと ぼくは 言った。ノアは じぶんの
とってに ついた。
フリータは せなかと 手で とびらを おさえた。
「とまれ！ とびらを おさえてる！ 通って！」
通れた。たたんだ まま。ぜんぶ。

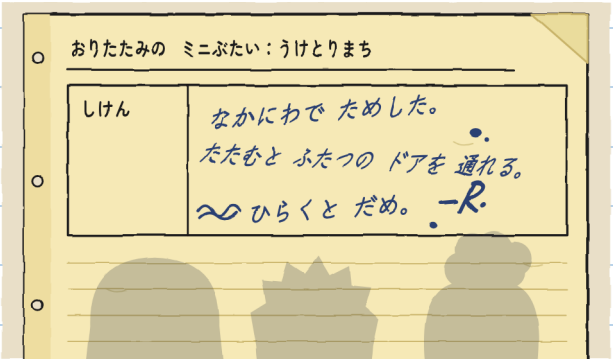


「41ぷん」と イレーネさんは 言った。
イナズマは 14分 かかった。3人は じてんしゃの よこに
すわって、あせも かいて いなかった。
マラさんが はこを かかえて 来た。イレーネさんは、
なかにわの ゆかに たたんで ある ミニぶたいを 見た。
ベルトも ちゃんと ついて いる。イレーネさんは
とうろくの かみを マラさんに 見せた。フリータが
みどりの ペンを イレーネさんに わたした。
「これで いい」と イレーネさんは 言って、
ラベルに サインした。



ラベルに「とどけた」と いう じが 出た。だれも
書いて いない。

イレーネさんは びひんリスト、つまり センターの
もちものの リストを ひらいた。ミニぶたいは もう
ページが あって、ふるい 1ぎょうが、ひどい 字で
書いて あった。

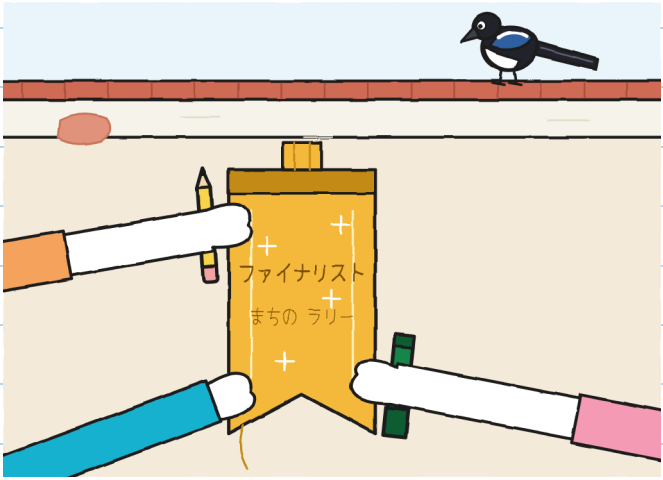


「わたしが 来る 前の ことです」と イレーネさんは
言った。「だれが 書いたのか 知らない」
「わたしたちも 知らない」と フリータが 言った。
「でも だんだん わかって くる」
R.は その なかにわに いた。おくる 前に ミニぶたいを
ためした。こんどは 2つの ドアを はかった：
とびらと、ふるい ドア。

エリアさんの ドア。なかにわの ふたつ。ドアを はかる 人。
ファイルに 書く。 -J.

イナズマが かった。やりなおしは 1回も なし。
ごほうびは、エリアさんの おおきな パンで、こなで
1と 書いて あった。ゾエは 3つに わけた。ブルーノの
ぶんは ゾエの ぶんと おなじ。

にもつを ぜんぶ もって ついた チームに、
イレーネさんは リボンを くれた。



「ファイナリストは さいごに つく 人」と
フリータが 言った。
「さいごまで つく 人だよ」と ノアが 言った。
「ぼくたちは さいごに さいごまで ついた」と ぼくは
言った。「どっちも ほんとうだね」

「せっかく ここに あるから」と イレーネさんは
言った。「はじめて つかいましょう」
マラさんと イレーネさんが ひらいた。ぼくたちは その
うしろ。2分で げきを つくる ことに なった。ノアが
やくを わけた。その 前に 聞いた：
「あまり しゃべらない 人は？」
ぼくは 手を あげた。
パンくずは ベラさんから はなれて、1メートル
とんだ。かべの 上に とまって、しっぽを まどの 前に
たらした。もう げきだ。まだ はじまって いないのに。



げきの なまえは「はいりたがらない にもつ」。
フリータは マラさん。かみの ぼうしを かぶって。
ノアは ぜんぶの ドア。ぼくは にもつで、まどから
かおを 出した。
「こうぼうは？」と ノアが 言う。
「ここは ぬいものだよ」
「かえす」と ぼくが 言う。
9回 言った。おきゃくさんが 数えて いた。10回目に、
ノアが りょううでを ひろげた。ぼくは もうひとつの
ことばを 言った。
あいさつの ときは、3人で かおを 出した。
はいれた。ぎゅうぎゅうで。

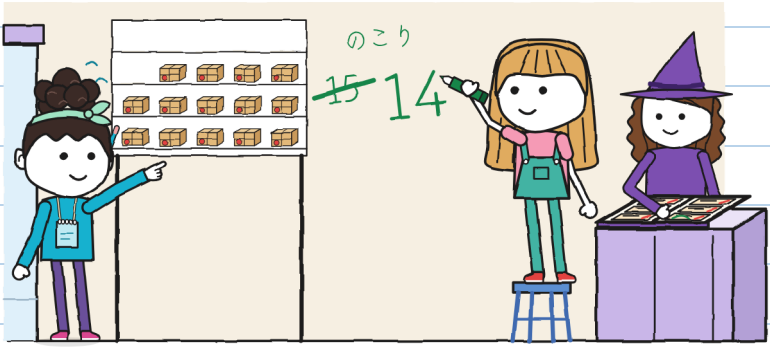


ばらばらには しない。ひとりが ちぢむ。 —J.

第6章

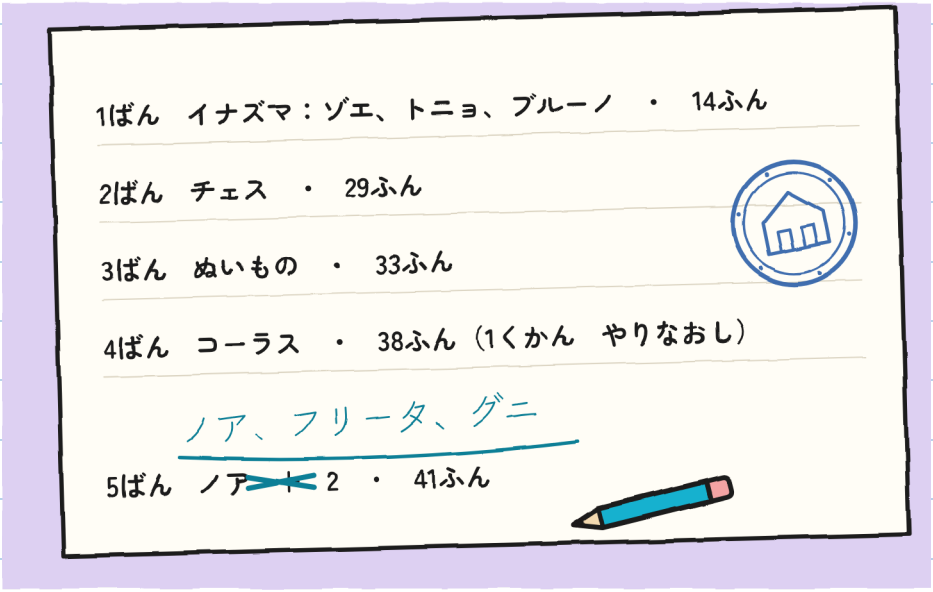
ラリーが おわって、なにが のこる？

午後、ラベルを もって 店に もどった。ノアも 来た。
フリータは はりがみを 見て、マラさんを 見た。
「いい？」
「あなたの はりがみでしょ」
フリータは 15を 線で けして、大きく 14と 書いた。マラさんは ラベルを 本に はった。ほかの 5まいと いっしょに。



ノアは 小さな 声で 数えた。14に なった。
ノアは 数えられる。 ーJ.

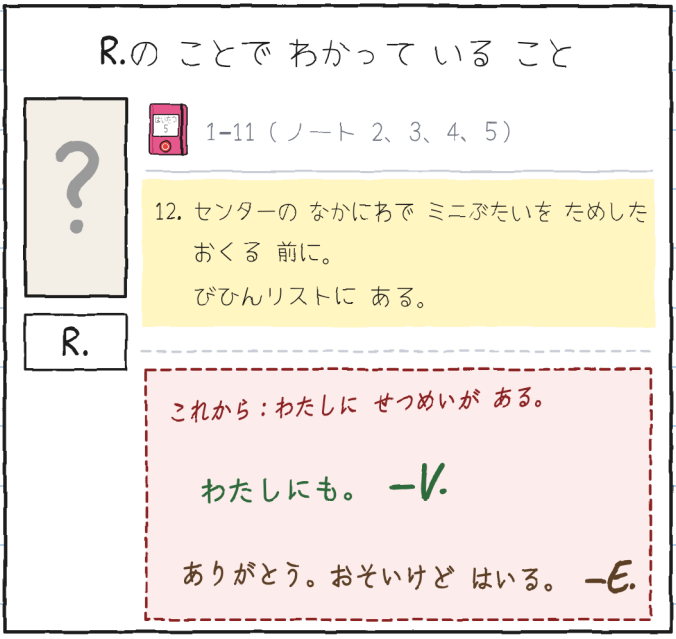
トニョが じゅんいを もって 来た。ぼくは
ノートに 書きとめた。



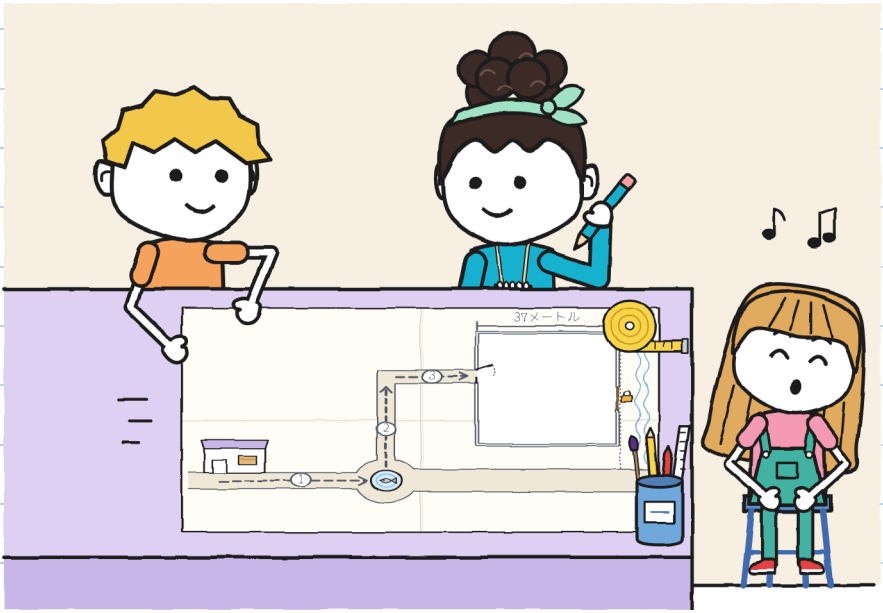
2回 見た。「ブルーノ」は そのまま。線も 引いて
ないし、上に 何も 書いて ない。

ノアは ターコイズの えんぴつで、ぼくたちの チームの
ところを なおした。だれも たのんで いない。
「月曜日は、あなたたちの 名前を 知らなかった」と
言った。「まあ、グニの」

R.の ふだを 出した。ヒントは 11。1つ 足した。
トニョは それを 読んだ。下の じぶんの メモも
読んだ。何も 線で けさなかった。
「ミニぶたいを ためした」と 言った。「おれの ベルは
ためして ない」
「それは わからない」と フリータが 言った。
「おれの ベルの ことは、どの びひんリストにも
1ぎょうも ない」と トニョは 言った。
それも ほんとうだった。

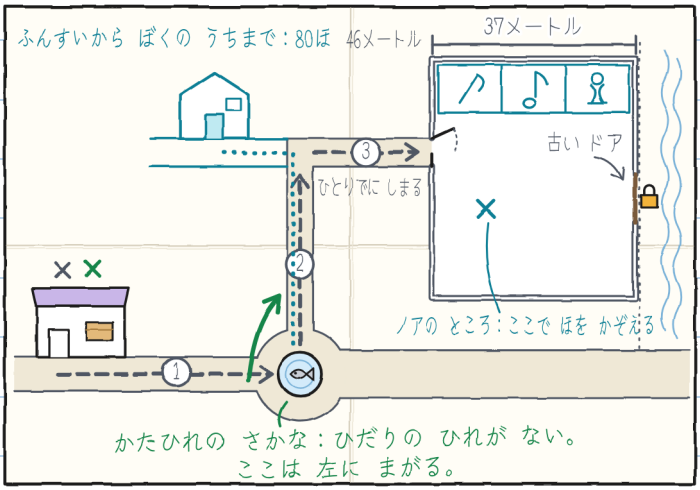


それから ちずを カウンターに ひろげた。もう
ひろげて あった。
「きみの ぶんが たりないんだ」と ノアに 言った。
「ふんすいから むこうの ところ。その 道は
メートルしか しらない」
ノアは フリータを 見た。フリータは てんじょうを
見た。口を 出さない ときの くせだ。
「かいて いい？」
「その ために 見せるんだよ」
ノアは みみの うしろから えんぴつを ぬいた。



ノアは じぶんの 道と、センターの なかと、きょりを
歩数で 書き足した。ぼくは よこに メートルを
書いた。フリータは がまん できなくて、ふんすいの
かんばんを 書いた。

まちの ちず（3人の）



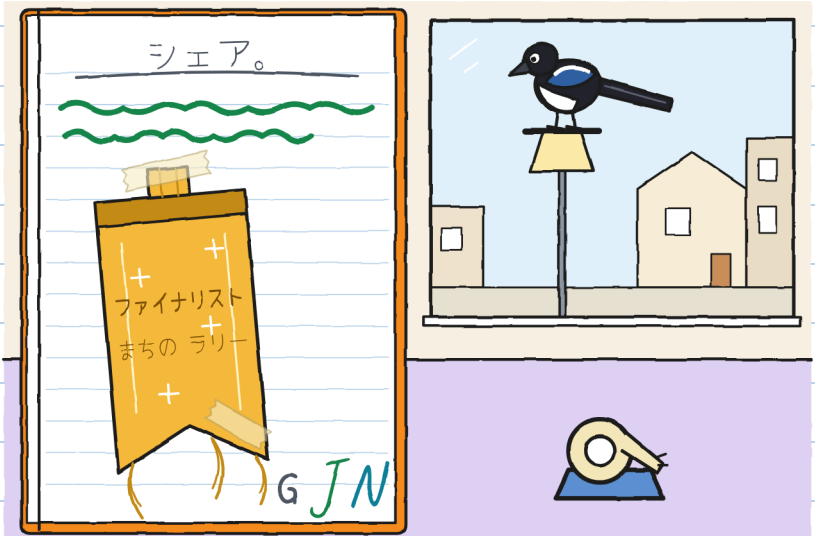
かいて いる あいだに、かたひれの 魚の 話を 聞いた。
長い 話。みんなが 言うほど よくは ない。でも
もう おぼえた。

すごく いい 話。でも、わたしたちが へたに 話した：
いっせいに しゃべったから。 —J.

フリータは リボンを 手首に むすんで いた。もう いとが 3本 ほどけて いた。

「わたしが もって いたら、月曜日には いとだけに なる」と 言った。「ノートに しまおうか？」

1ページ目の「シェア」の 下に、りょうはしに テープを 1つずつ つけて はった。ほどけた いとも そのまま かいた。ほどけたら ほどけたで いい。ほんとうより あたらしくは かかない。



わたしの ノートは、きみのほど よく とじない。

だから ね。 —J.

ノアは ぼくの ゆるしを もらって、ページを うしろへ めくった。ぼうせんの すみに 来た。

「これは？」

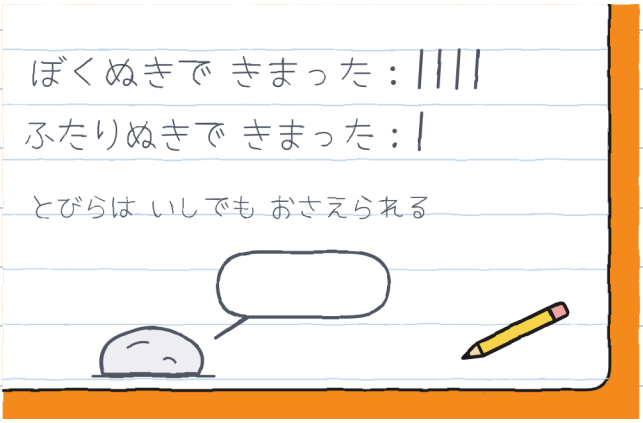
「まちがって つけて いた けいさん」

「こっちは？」声に 出して 読んだ：「とびらは いしでも おさえられる」

「火曜日に 思った」

「いしは『ふちいし』とは 言わない」と ノアは 言った。「『とまれ』を 15回も 言わない」

ぼうせんは きさなかった。えんぴつだから けせるけど、けしたく なかった。



きさないで。ちょっと わたしの でも ある。 —J.

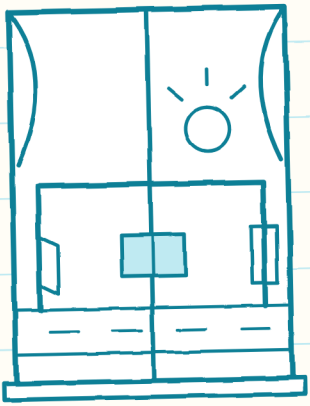
日曜日の 夜明け、ノアが 見はった。センターの 前に すんで いる。9時に メモを 店に もって 来た。歩数を かぞえながら 来た。

7:38：ミニぶたいは こうぼうで、たたんで ある。

7:44：夜が あける。うごかない。

7:50：そのまま。歩いた 歩数：0。 ーノア





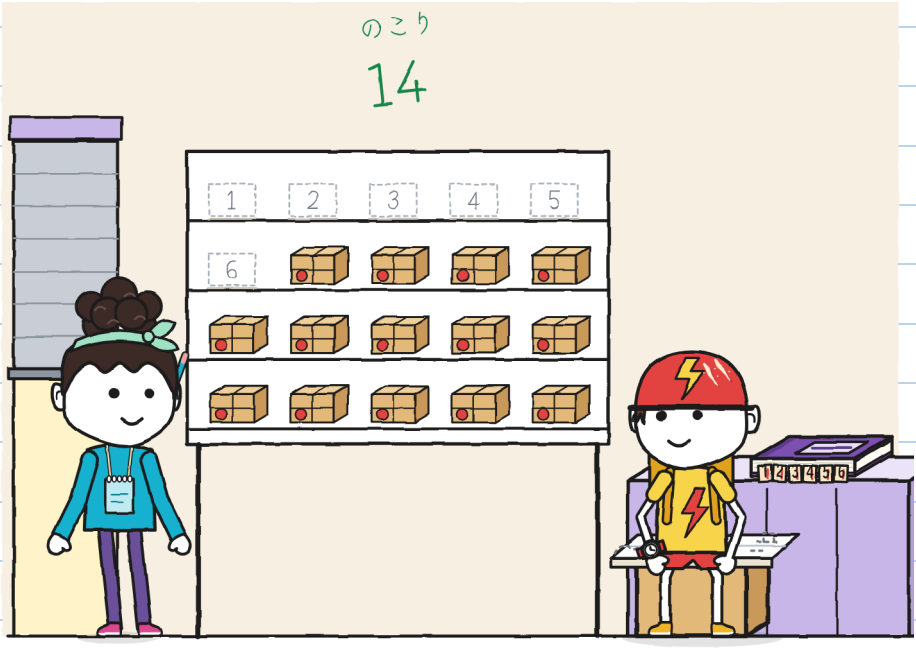
見はりも かぞえるのも わたしより じょうず。パンは やかない。3つの うち 2つ。 ーJ.

マラさんは シャッターを 少し あげて、中に 入れて くれた。ぼくは たなを かいた：にもつ 14こと、あき 6つ。はりがみは かえなくて よかった。

「6つ」と マラさんは 言った。そして 本を とじた。

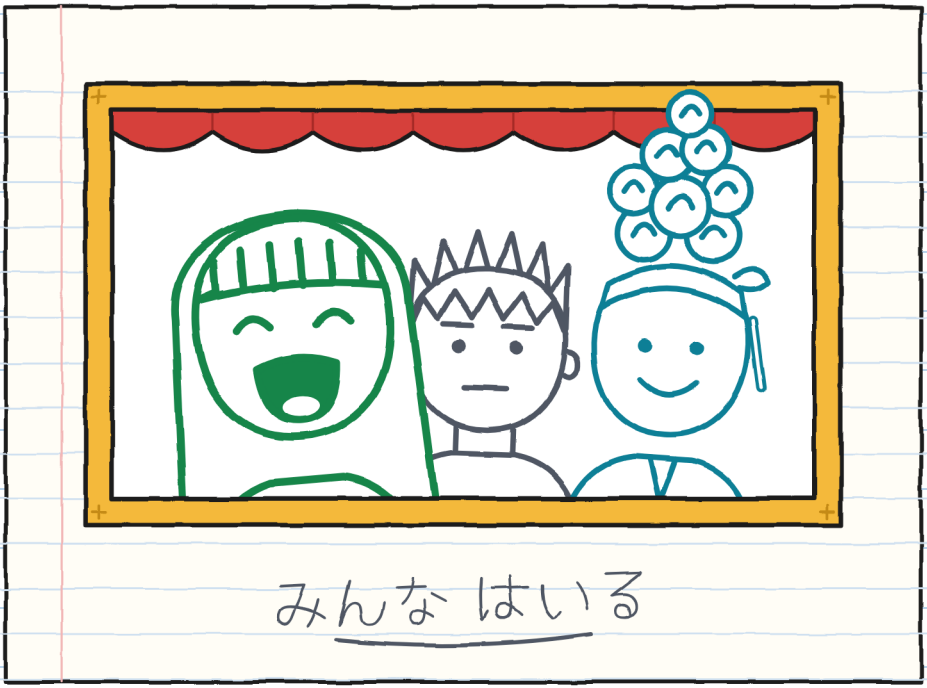
トニョは はこに すわって、日曜日なのに ヘルメットを かぶって いた。ノアは ドアの そばに 立って いた。

「すわって」とも 言われない。「出て いって」とも 言われない。来たかったから 来た。月曜日には れんしゅうが ある。



ノートの さいごに、ミニぶたいの まどを
からっぽで かいた。

みんな 中(なか)に じぶんを かいた。ぼくは えんぴつ。
フリータは みどり。ノアは ターコイズ。
ノアは ぼくの(き) ノートに かく 前(まえ)に 聞(き)いた。
フリータは 聞かなかった。



シェアは シェア。1ページ目(め)に 書(か)いて ある。 —J.

6ばんめの はいたつ。くかんごとに：

	くかん	だれが はこんだ	だれが あんない	なにが あった やりなおし
	みせ → かたひれの さかなの ふんすい	グニと ノア	フリータ	ふんすいの まがる ところ （3回）
	ふんすい → かど	フリータ と ノア	グニ	なし （でも ゆっくり）
	かど → なかにわ	グニ と フリータ	ノア	入口： ちずが ふるかった
	どようび	3人で	3人で、 こうたいで	ベルト（2回目で、 3つめの あなで）
	ぼくたちの 前	マラさん ひとり	だれも	9回 はこんだ
	R.	?	?	わからない

	もつ 	あんない 	みちあけ 	しらせ 
1	グニと ノア	フリータ	フリータ	フリータ
2	フリータと ノア	グニ	グニ	グニ
3	グニと フリータ	ノア	ノア	ノア

3つの らん。いや、4つ。3つの なまえ。

からっぽは なし。 —J.

ありえない はいたつ ・ 7

（もうすぐ）

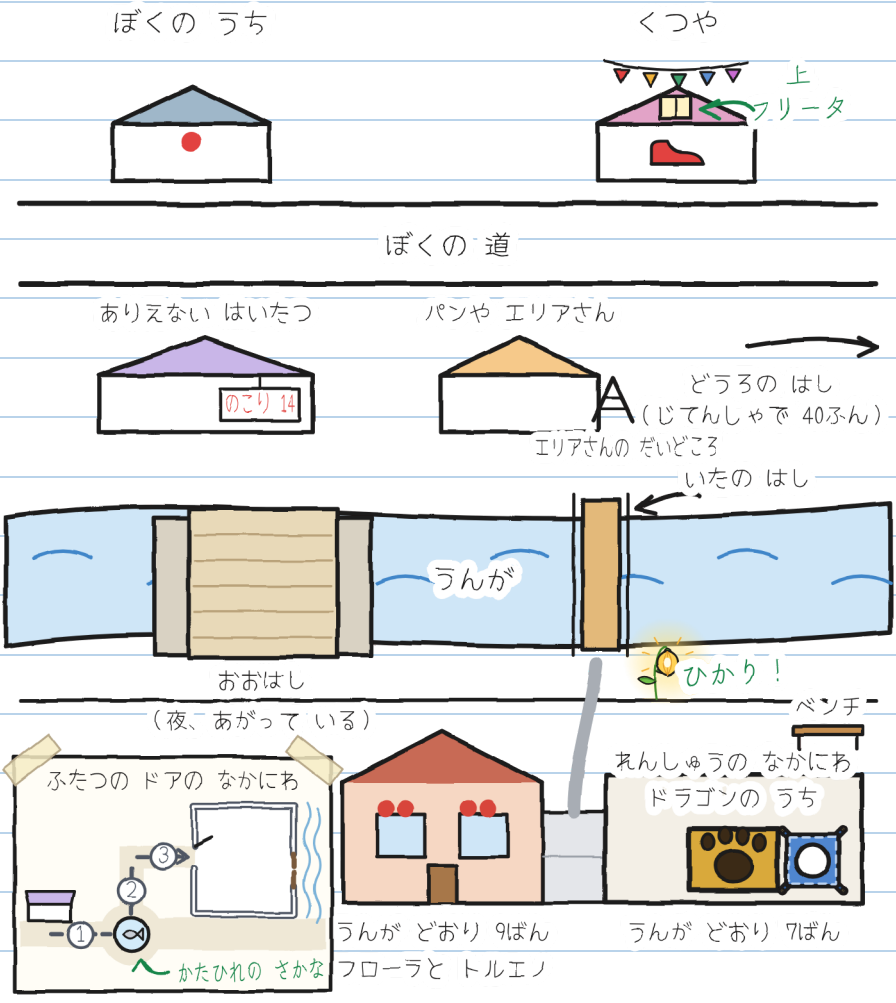


こんどの ラベルには 時間(じかん)が 書(か)いて あった。その時間(じかん)には、ぼくは もう パジャマだ。

ほかの みんなが しめる ころ、だれが おきて いる？

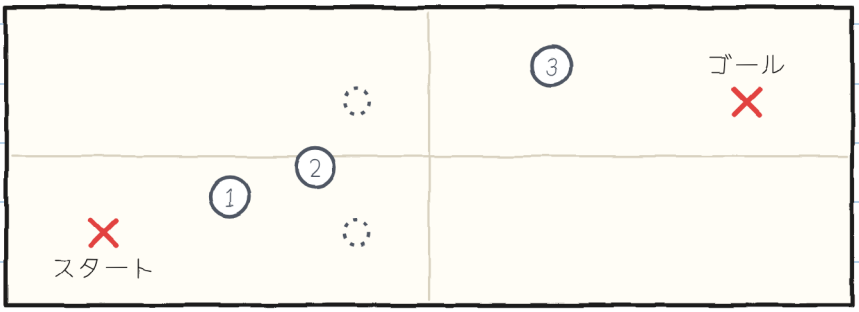
わたしの ほかに。 —J.

まち（6ばんの ばん）


ぼくの うち
くつや
上
フリータ
ぼくの 道
ありえない はいたつ
のこり 14
パンや エリアさん
どうろの はし
（じてんしゃで 40ふん）
エリアさんの だいどころ
いたの はし
うんが
おおはし
（夜、あがって いる）
ひかり！
ベンチ
ふたつの ドアの なかにわ
れんしゅうの なかにわ
ドラゴンの うち
1
2
3
かたひれの さかな
うんが どおり 9ばん
フローラと トルエノ
うんが どおり 7ばん

きみの みち

だれが はこぶ？ だれが あんない？ だれが みちを あける？ だれが しらせる？



3にんメーター

	もつ	あんない	みちあけ	しらせ
くかん 1				
くかん 2				
くかん 3				

ひとつの らんに いつも おなじ なまえが 出たら、かえて ね。 —J.

ひとつの おはなし、6つの サイズ

サイズは 6つ、3さいから 16さいまで、ことばは 20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**は ページも え も おなじ。**XL**は しょうせつ。かわるのは かたりかた だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
グニは ひとつ ことばを かいて、ばしょを あけた。「シェア」って ことば、みえる？

サイズ XS · A1
ぼくは ことばを ひとつだけ かいた。ページの はんぶんは あけて おいた。1ぷんも あいて いなかった。

サイズ S · A2
1ページ目に、ことばを ひとつ 書いた。ページの はんぶんは、ねんのため あけて おいた。1分も あいて いなかった。

サイズ M · B1
1ページ目に、ことばを一つだけ書いた。ページの半分は、念のためあけておいた。あいていたのは、1分もなかった。

サイズ L · B2
1ページ目に、ことばを一つだけ書いて、ページの半分は念のためあけておいた。あいていたのは、1分もなかった。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

それぞれの サイズで。おなじ ミニぶたい。 —J.

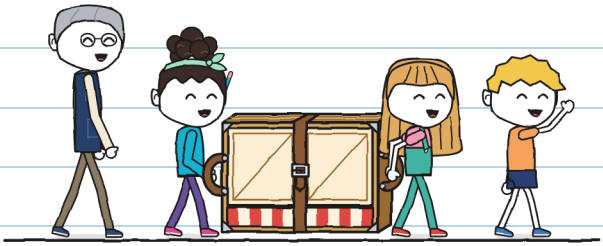
かぞくと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

ほんとうに はこぶ とき：どうする

1. 出る 前に、みちを ぜんぶ 見る。
2. ひとりは 手が あいて いる：ドアを あけて、しらせる。
3. 手は とってに。ちょうつがいと ロックから はなす。
4. にもつを もったら はしらない、きょうそうしない。
5. だれかが「とまれ」と 言ったら、みんな とまる。
6. まず ゆかに おく。はなしあうのは それから。
7. 大きい ものは 2人で あけて たたむ。おとなと いっしょに。

「おはなしの なかだけ」の はんこは、お話の 中では おきても、ほんとうに はこぶ ときには おきない ことの しるし。



みちの ことで 知って いる ことが あれば、
先に 言って。 —J.